あなたの力をもって

「士師記」6章11節から18節まで朗読。

14 節「**主はふり向いて彼に言われた、『あなたはこのあなたの力をもって行って、ミデアンびとの手からイスラエルを救い出しなさい。わたしがあなたをつかわすのではありませんか』**」。

今日は聖霊降臨・ペンテコステといわれている記念の日です。日本でも端午の節句など、節句が月々にあります。同じように、イスラエルにもそういう伝統的な習慣として節句、その「時」を祝う行事がありました。その中に「五旬節」といわれる日があります。過越の祭というイスラエルの人々にとって一年の中で一番大切な行事があります。これは後のイースターでもあります。神様は、かつてイスラエルの民がエジプトから救い出された時、「この月をあなたがたの初めの月とし、これを年の正月とせよ」（出エジプト 12:2）と言われました。だから、イスラエルの人々の昔は、過越の出来事、これを一年の始まりとしたのです。それから更に五十日たって、そこで神様の祝福を受けるのです。「旬節」といって十日ごとにいろいろな行事をするのです。日本の仏教では、亡くなった人の記念を七日ごとにして、七度で四十九日といいます。イスラエルにもそのような仕組みがあったのです。それが五旬節です。イエス様は十字架に死んで葬られました。しかし、三日目に甦って、弟子たちや多くの人々に40日にわたってご自分を現して下さいました。40 日ほど過ぎて、弟子たちが集まった目の前からイエス様は天に携えられ、見えなくなってしまいました。その時イエス様は、弟子たちに「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい」（使徒 1:4）と言われたのです。それで弟子たちはイエス様が天に帰られた後も、エルサレムの一つの所に集まり、毎日祈りを続けていたのです。その約束のものが何であるか、弟子たちには分かりません。サプライズです。「いったい何を神様は下さるのだろうか？」そのことについてのヒントを既にイエス様は語っていました。最後の晩さんの席でイエス様は「わたしが天に帰ったならば父にお願いして、あなたがたのために真理の御霊、聖霊を送ってあげよう」（ヨハネ 14:16）という約束をしておられました。そのことを指しています。神様の与えて下さるものが霊であることを薄々感じていたと思います。それがどのような形で、どのように与えられるのか、これは分からない。「待て」とおっしゃる。それで一つ所に集まって、祈りながら、神様の与えて下さるその時を待ち続けていました。よく待ったと思います。「何日間待て」とか、区切りをつけられたわけではなく、「与えられるまで待て」とおっしゃるのですから、「いつまで待てばいいのだ」と分からないのです。与えられるまで待つ、それで弟子たちは祈り続けていました。ちょうど五旬節、過越から 50 日目を祝う日、思い掛けない出来事が起こります。激しい風が吹いて

来たような物音がして、そして、集まった人々の上に舌のようなものが、炎のように分れて現れてとどまった。何のことかよく分かりません。それらは譬えでありますから、「…のような」「…のような」と言われていますから、炎でもなければ舌でもない。何か異常なことが起こったのです。その結果、彼らの内に、それまでとは違った新しい力が満たされる。その証しが、そもそも彼らの言葉ではない、外国の言葉を自由自在に操ることになったという記事があります（使徒 2：1～）。この「言葉を様々に使う」とは、ただ単に外国語を話すようになったという、スピードラーニングの話ではない。言葉を操るというのは力の象徴です。新しい、彼らには未体験の力が注がれたことです。そして、そこに集まった人々は早速町へ出掛けて、イエス様の福音、喜びのおとずれを伝えたのです。大胆不敵と言いますか、彼らはイエス様が十字架にかけられて葬られましたが、その時の興奮がまだ冷めやらない、50 日位はたちましたが、まだ多くの人々の記憶に生々しく残っている時期です。そのような時に、イエス・キリストの名を出そうものならば、どういう難癖を付けられ、どんな被害に遭うか分かったものではない。

最近のいろいろな中東のニュースを見ると、非常に激しい騒動が起こります。イエス様の時代はもっとそういうものが頻発したでしょう。秩序のない時代ですから、何が起こるか分からない、危険に満ちた時代であります。だから、彼らは隠れ潜んでいたのですが、神の霊が注がれた時、彼らは力を受けて、恐れず町へ出掛けて行きます。そのことは「使徒行伝」2 章以下に記されています。ペテロは多くの人々の前に立って、「あなた方が殺したこのイエス・キリストは、神の遣わされた救い主であった。それを不法な手であなたがたは殺してしまった。十字架につけてしまった」とユダヤ人や多くの人々を激しく非難する。ペテロとは思えません。イエス様のことを「わしゃ、知らん」と言って、逃げ隠れした弱虫のペテロです。ところが、そのペテロを造り変えてしまう力。これは神の霊の力、神様から注がれた御霊の働くところです。そして、「その御霊が私たちの内に臨む時、力を受けて（使徒 1：8）」と、かつてイエス様が言われましたが、そのように力が与えられ、新しい業をすることができる。私たちもそう感じます。普段の生活で年を取ってくる。いろいろなことで不自由な状況に置かれる。若い時のような力がない。元気がない、あれもできない、これもできない。だんだんとしぼんでいくような気分になります。ところが、神様は私たちに力を与えて下さる。満たして下さる。あふれるばかりにエネルギーが与えられる。神様が与えて下さる力は私たちの弱さを補ってくれます。と言って、自分の思い通りになる、したいことができるようになることでは決してありません。これは何のための力か。イエス様はよみがえられた後、弟子たちの集まっている所に現れて下さいました。弟子たちは悲しみに暮れていた真っただ中に、イエス様がご自身を現わして、「安かれ、心配するな、恐れるな」と言われ、手の傷、

胸の傷を見せて、「わたしはこのようによみがえった」と証しして下さいました。「弟子たちは主を見て喜んだ」、弟子たちはイエス様を見て大喜びをしました。その時イエス様が弟子たちに最初に言われたのは、「**安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす**」。今度はイエス様が私たちをこの世に遣わして下さる。実はこれがイエス様の十字架のあがないの目的です。また、イエス様を信じて救いにあずかった者の生き方は、まさにこのことです。世に遣わされた者となる。そのために私たちの身分が変わる。度々申し上げるように、イエス様を信じて、キリストの十字架の死とよみがえりにあずかって、罪を告白し、悔い改めて、キリストの者として新しく生きる者と変えられる。その証が洗礼式です。そして水に葬られた古い自分が死んで、今度はその水から上がって、これからの生涯は、自分のために生きるのではなく、新しく主のために生きる者と変えられた、これが救いです。今までは自分のために生きてきた生涯、ところが、今度は主のものとなり、主のために生きる者と変えられること、これが救いといわれるものです。私たちは今ここに集まっていますが、実は皆一人ひとりイエス様の救いにあずかって、もはや自分のために、この世のために生きているのではない。

言われているように、国籍を天に移されたのです。私たちはこの世のものではなく、今度は天から、神様の所から遣わされた者となった。だから、この世はいつまでもとどまっている場所ではない。そこで遣わされた者の使命が終われば、当然のごとく本国に帰って行きます。自分の国籍のある所へ戻って行きます。私たちは派遣された者となっているわけですが、普段はそのことをあまり自覚していない。この世の生活、この世の命、これが少しでも長く続く。元気で思い通り、願い通り自分の夢が実現する人生でありたい……、それでは神様の救いにあずかった者の使命を果たすことができません。イエス様は「**父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす**」とおっしゃいました。イエス様ご自身が神の位に居給うた神の御子でいらっしゃいます。ところが、父なる神様のご計画と御思いに従って、神の位を捨てて、あえて人の世に降って下さいました。私たちと同じ肉体をとって弱きものとなり、この世に住んで下さいました。そして全ての人の呪いと刑罰を、父なる神様の裁きをご自身が十字架に受けて下さいました。その主イエス・キリストを信じる私たちも、イエス様と共に死んだものとなって、今この世に遣わされている。イエス様によって私たちは遣わされて今日ここに生きている。どうぞ、このことをしっかりと自覚しておきたい。忘れてはならない。いつもどんな時にも、私はこの世のものではなく、ここに遣わされてイエス様のために、主のために生きていることを自覚してください。それを忘れてしまうから、この世が全てであり、この世にいる限り安楽な、悩みのない生涯でありたいと思いますが、しかし、もし自分の願い通り、思い通り、何でも

自分のしたいようにするのだったら、それは神の国の民ではなく、遣わされた者としてではなく、この世に属する者でしかない。「**わたしたちは、すでに神の子なのである**」（ヨハネ第一 3:1）と宣言されています。私たちはもはやこの世の者ではなく、神のものとされた。「**代価を払って買いとられた**」（コリント第一 6:20）といわれています。今度はこの世に派遣された、この世に遣わされた私たちは、何が不可欠であるか？健康でもお金でも地位や名誉でもありません。何か？遣わされた私たちにとって最も大切なのは、神の力に満たされること。聖霊であります。

だから、イエス様は、「**『安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす』。22 そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、『聖霊を受けよ』**」と言われた。「息」とは聖霊です。聖霊は目に見える形あるものではありません。まるで空気のように私たちに取り込まれて、宿って下さる。かつて創世の初め、「創世記」に語られているように、鼻から命が吹き入れられて人は生きる者となった。人が神の命によって生きるものであることが、人の人たる条件です。イエス様は、神の国の住人として、私たちが真の人となる道として、「聖霊を受けよ」とおっしゃったのです。聖霊をあなたがたに注ぐと約束された出来事が五旬節の日に起こりました。弟子たちに神の霊、神の力が注がれたのです。それはただ、自分の夢を実現する、自分の不足している力を補って下さる神様の力としてではなく、神様の力に全面的に従い、それに振り回されて行くことに尽きるのです。御霊が、聖霊が、今度は私たちを神様の御心にかなうように、神様の御旨にかなうものとして、自由自在に用いようとしておられるのです。派遣されるとはそういうことです。神様が私たちをこの世に遣わして下さるのは自分の願いを実現するためではなく、私たちを通して神様のご目的と使命を果たす者として遣わされているのです。

今この地上にあって、私たちに、御霊は、主の御心、神の御心を絶えず語り続けて下さいます。今でも私たちの生活の中でいろいろなことに出会う時、右にするか、左にするか、選択を迫られる事態の中で、「右に行くべし」「左に行くべし」と、御霊は絶えず語り掛けて下さるのです。今は聖霊の時代、神の霊に生かされる時代です。神の霊は皆さんに宿っている。これからあなたがたに与えようという話ではなく、もう既に神様は「あなたに与えた」とおっしゃる。私たちに、既に神の霊が宿っていて下さる。御霊は今も盛んに私たちに語り掛け、働き掛け、思いを与え、願いを起こさせ、神様の御心に従わせようと押し出して下さる。ところが、私たちはそれを自覚しないといいますか、そのことを喜びとしない。いやむしろそういう思いを消し去って、肉の思い、この世の思いの方に引かれていく。あるいは、世の思いに私たちが流されてしまう。これはまことに残念なことです。イエス様の尊い命をもってあがなわれ、神の民、神の子供とされた私たちが今ここに、この地上に、この世に、そ

れぞれの生活の場に遣わされて来た。そこで私たちは何をするのか？共にいて下さる神の御旨にかなう歩みをして行くことに尽きます。

さて、先ほどお読みしました「士師記」の記事ですが、これはギデオンについての記事です。この当時イスラエルの国は、ミデアン人にしばしば襲われた時代です。イスラエルの民は力がない民族でした。だから、周囲の国々からいろいろと被害を受ける。殊にミデアン人からは収穫の度ごとに収穫物が強奪される。イスラエルの民が収穫した物を、武力をもって奪っていきます。これは致命傷です。なぜなら、収穫は年に一回しかありません。それを盗られたら、後は生活できないのです。だから、彼らは何とかしてこのミデアン人から自分たちを守りたいと願っていたのです。11 節に「**時にヨアシの子ギデオンはミデアンびとの目を避けるために酒ぶねの中で麦を打っていた**」と彼は収穫して脱穀をする物音が聞こえたら、それを聞きつけてミデアン人が必ず盗りに来る。だから彼らはその目を避けてひっそりと麦を脱穀する。その場所が酒ぶねの中、できるだけ隠れて、しかも密閉された場所として良かったのだと思います。酒を造る桶の中でやっている。そこへ主の使いが来て、12 節「**大勇士よ、主はあなたと共におられます**」と言われた。「大勇士よ」と、自分はミデアン人の目を逃れて、ソッとチョコチョッコとしかやっていない。何が大勇士、何だかちぐはぐな感じがしますが、神様はギデオンに「大勇士よ」と、ここにありますように「**主はあなたと共におられます**」、主が共にいて下さる。主が共にいること、これが聖霊が内に宿っておられることです。

聖書に「**わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである**」（マタイ 28:20）と言われています。「主が共におられる」という表現を使います。その意味は、聖霊が私たちの内に宿って住んでおられることです。主が私と一緒におられると言われても、私の外側のどこかにいらっしゃるように思う。「どこにおるか分からん。隠れたことを見ておられると、何やら気味が悪い話や」という話になりますが、そうではなく、主が共にいて下さるというのは、私たちの内に住んで下さることです。だから、離れているわけではないのです。イエス様が「**見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる**」と約束したことが具体化され、聖霊が臨んだのです。ここで「大勇士よ」と言われたのは、ギデオンが勇敢な人物、あるいは力強い人だから大勇士かというと、そうではなくて、ギデオンと共にいらっしゃる神の力が大勇士なのです。勇士たる資格といいますか、その値打であります。ところが、そのことがまだギデオンは分かりませんから、13 節に「**ああ、君よ、主がわたしたちと共におられるならば、どうしてこれらの事がわたしたちに臨んだのでしょう**」とつぶやく。神様が共におられるというならば、どうしてミデアン人から散々にいじめられなければならないのか、こんな不幸なことがどうしてあるのだろうか？しかも、その後に「**わたしたちの先祖が『主**

はわれわれをエジプトから導き上られたではないか』といって、わたしたちに告げたそのすべての不思議なみわざはどこにありますか」と。これは回りくどい言い方ですが、はっきり言うと、「かつて私たちの先祖が体験した不思議な御業はいったいどうなってしまった？そんなものは無くなったのか、その力はもう無いのか」と、ギデオンはそこまで言っているのです。そして「今、主はわたしたちを捨てて、ミデアン人の手にわたされました」。ところが、実はそうではないのです。神様は見捨てておられるわけではない。

14 節に「**主はふり向いて彼に言われた、『あなたはこのあなたの力をもって行って、ミデアンびとの手からイスラエルを救い出しなさい。わたしがあなたをつかわすのではありませんか』**」。「これからあなたの力をもって行って」と、この「あなたの力」とは何の力か？それは今ギデオンが持っている力です。「いや、わたしにはミデアン人と戦う力はない」。でも酒ぶねで麦を打つ力はあるのです。「そんなものは何の役にも立たん。そんな力は吹けば飛ぶようなもの、無いようなものだ」と、「そんな力をもって行ってもどうなる？役に立つわけがない」。これがギデオンの思っているところです。ところが神様は「あなたの今の力を持って出て行きなさい」「わたしがつかわす」、「そこに共におって下さるのだから、何も恐れることはない」。

14 節のお言葉を私は決して忘れられません。というのは、まだ父が元気だった頃、福岡から北九州に来ていました。八幡で一晩泊まって福岡へ帰る生活が何年か続きました。いつも帰る時、父が祈ってくれる。その時に父がこのお言葉を引いて祈ってくれるのです。「この力をもって行きなさい。わたしがあなたをつかわすのだから」と。後半は分かるわけですよ。「主が私を遣わしてくださる。だったら大丈夫。でも『この力をもって』と、何の力だい？」と気になりました。「私には力がないし、『この力』って、どこにその力がある？」と思っていました。疑問に思っていた時、神様がちゃんと教えて下さったのです。「この力は今あなたがもっている力です」「いや、持っていない」、持ってないけれども、あるじゃないか。生きているじゃないか。死んでいるわけではない。いくら年を取ったからといっても、何もできないわけではない。食べることは食べるし、人の悪口は言うし……、力はあるわけです。しゃべらせればしゃべるし、「でも私は力がない」「私はできません」「私はこうです」と、つい自分の力だけを見て、「これじゃ役に立たない」「これじゃ何の足しにもならない」と思う。ところが神の使いはギデオンに対して「その力をもって出なさい。わたしがあなたをつかわす」。神様が私たちをそこへ遣わしておられるのだから、そこで神様が働く力を現わして下さる。「いや、力が与えられたら出ましょう」。「私にそれだけの能力を与えて下さい。そしたらちゃんと出掛けます」。これが間違いです。私たちはいつもそこで失敗するのです。与えられて、整って、条件がそろって、「これだけあれば、よし、出よう」。それでは

神様の力を証しすることができない。だから、神様は、あなたの力、無いと思う力だけれど、神の力が注がれていると信じて……、ここが信仰です。結果はまだ見ていないけれども、それを信じて踏み出して行く。「踏み出す」ことが大切です。

この時ギデオンに対して神様はそのことを求められました。いろいろなことがありましたが、最後にいよいよミデアン人との戦いに出掛けようとする時、彼は国中に兵を募ります。志願した人々が 3 万人以上集まる。「神様、これだけの人々が集まりました」と祈ったところ、「多すぎる」と言われる。そして「ちょっとでも家のことが心配なら帰りなさい」と帰らせました。残った人は一万人位、「これでどうでしょうか？」、「それでも多すぎる」、そして最後に残ったのは三百人、たった三百人、ところが、「それをもってミデアン人との戦いに出よ」とおっしゃる。ギデオンは「これは神様から遣わされたこと」と信じていましたから、神様は作戦を与えられる。壺の中に火をともして、300 人を三隊に分けて、夜襲をかける。そして一斉に歓声を上げてから壺を割る。割る音と歓声と角笛でガーッと大歓声が響き渡る。暗闇の中でパッと火が燃え上がるのです。それを見たミデアン人は一目散に逃げ出してしまう。神様は、沢山の人の数をもって勝利するのではなく、僅かな、取るに足らないそんな力であっても、神様が働かれる時、そこに新しい力が湧いてくる。しかもそれは神様の御心です。「わたしがあなたをつかわすのではありませんか」、「神様が共にいて下さって、あなたをこのことに遣わして下さる。だから、出なさい。出なさい」。

これは私たちの普段の生活でもそうです。いろいろなことで自分の力のなさを覚える。知恵がない、力がない、健康もない、体力もない。経済力もない、また人脈も学歴もない、無い無いづくし、でも少なくともまだ生きている。だったら「主がせよとおっしゃるならば従います」と踏み出して行く。しかもその場合に、自分の願いを実現する業ではない。自分の何か外側にある業ではなく、実は、このミデアン人との戦いは私たちの内なるものとの戦いです。私たちの内にある自我性、我執、情欲、情動、そういう肉の力に対して戦っていく。自分を造り変えて行くことです。これがなかなか難しいのです。人は自分が一番可愛いですから、「自分はこんなところがあって駄目だ」と思いつつも、なかなかそれを捨てることはできない。しかし、神の御霊は「こんなことをしてはいけない」「こんなことを言ってはいけない」「こんなことを思ってはいけない」、「こんなことはどうだ、こうだ」といつも教えて下さる。外側の事情や境遇、環境がどうのこうのという問題はいとも簡単なことです。無ければ無くて済むわけで、有れば有ったでいいし、そういうものです。ところが、死の間際まで、私たちにとっての一番肝心な問題点は自分の内なるものです。愛せない心、許せない心、そういう私たちの内にある肉の力に打ち勝っていく。それを砕いて、御心にかなう者となる。神様の姿かたち、キリストの姿かたちにまで私

たちを造り変えて下さる。これが、今私たちが遣わされている戦いです。「わたしがあなたをつかわすのではありませんか」と主は語っています。遣わされるというと、何か自分とは違う別の所に行くようですが、遣わされるとは、今新約の時代、私たちにとって、誰か人と争い事を起こそうというのではなく、自分の内にあるミデアン人、自分の内に巣くっているペリシテ人、自分の内に宿っているアンモン、モアブ、セイル山の人々、わたしの内にあるアマレク人を滅ぼし尽くせと、神様は私たちを遣わして下さった。しかし、私どもは「いや、これは生まれながらの性質だから仕方ない。周囲の人は皆我慢してね」と、そうではなくて、そういう自分を、神様はもう一度造り変えようとして、御霊を注いで下さる。神の霊を注いで下さる。「親父がこんな性格だったし、俺がそうなっても仕方がない」と言う。そうではないのです。親父がどうであれ、何がどうであれ、私たちは今キリストのものとして、あがなわれた者、私たちが戦うべき相手は、外なるものではなく、内なるものです。そして、その戦いの力は、神様から与えられる。これが私たちに求められていることです。だから神様がギデオンに対して言われているように、14 節「**あなたはこのあなたの力をもって行って、ミデアンびとの手からイスラエルを救い出しなさい。わたしがあなたをつかわすのではありませんか**」と。「神の力があなたの内に宿っておられるから、信じて、与えられている使命を、神様が遣わして下さった信仰の戦いを戦い抜いて、勝利を得なさい」。私の身も心も、外も中もことごとく造り変えて、神様は新しくしようとして下さる。私たちを神様のものとして、御前に「きよく傷のない者となるように」（エペソ 1:4）して下さるのです。どうぞ、それぞれ遣わされていく生活の場で、人と戦うのではなく、その生活の場にあってこそ、私たちは自分の見えない心が現れるのです。事がなければきれいな心に見えます。ところが毎日の生活の様々な具体的な問題の中でこそ、自分の敵がどこであるかがよく見えてくる。その敵に打ち勝っていく力は、御霊による以外にない。どうぞ、主の霊が私たちに今日注がれて、そして私たちを清め、整え、新しく造り変えて、栄光の姿にまで造り変えて下さる。だから「コリント人への第二の手紙」にそのように語られています。「**栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである**」(3:18)。神の聖霊が私たちの内に宿って、私たちの心と思いを造り変えて、神のものとして御前に立たせようとして下さる、これが御霊が私たちの内に宿るご目的です。

「**あなたの力をもって行って**」と主は言われます、私たちには力がないけれども、神様が力をふるって、造り変えて、新しくして下さる。「**わたしがあなたをつかわすのではありませんか**」。主が私と共におられることをしっかりと味わい知りたいと思います。